

第30回写真『ひとつぼ展』 公開二次審査会 REPORT



頭が真っ白になって撮った9才年下の妹 その切羽詰った写真が決選投票で票を集めた グランプリ受賞 奥出和典

- 日時 2008年2月21日(木) 18:00~20:30
- 会場 リクルートGINZA7ビル セミナールーム
- 審査員
金村修(写真家)
原耕一(アートディレクター)
平木収(写真評論家)
安田千絵(写真家)
大迫修三(クリエイションギャラリー-G8)
(50音順・敬称略)
- 出品者
奥出和典 岸田努 澄哉 たかはしゆうこ 都筑真理子
中井菜央 長岡修司 中村木綿子 中山正義 林孝輔
(50音順・敬称略)
- 会期 2008年2月18日(月)~3月6日(木)



●「十人十色のバラエティに富んだ作品」「ポートフォリオと展示作品の印象が違う」

立ち見を含めた一般見学者で超満員となった、第30回写真『ひとつぼ展』の公開二次審査会場。あと2時間半後に日は節目となる写真部門30代目のグランプリが決定する。ガーディアン・ガーデンの展示スペースで審査員の質問に緊張しながら答えていた出品者10名が会場に姿を見せた。その後から5人の審査員が入場し席に着く。1年後の個展開催の権利をかけて、いよいよ審査会の幕が開いた。出品者が自身の写真にたいする思いを語ったプレゼンテーションの概略は以下の通り。

澄

子供のころ、何度も死のうと思ったことがある。しかし、生きていたから今ここに立っている。生きてさえいれば、亡くした人も思い出すことができる。だからこそ、アウシュビッツやヤスノバツで不条理に殺された人たちの想いを語りつづける。そう思った場所を旅して写真を撮った。



中村

都市周辺でスナップショットを撮ってきた。見慣れた街の中で目を閉じてみれば、自分が何かを見ていたことに気付く。私の目と指とカメラが調子づきずきにモノを捉える。その中では、光と闇も、幸せと不幸せも、私には同じように見えてくる。そんな曖昧さを写真にしたいと思った。

中井

子供たちとたくさんの時間を過ぎて、私は大人なのだと感じた。そして、子供の世界にはもう入れないと感じた。子供たちが何を考えているのか、わからないので写真に撮って見たが、撮れば撮るほどわからなくなる。答えが出ない感じを出したくて中央を開けた展示にした。



中山

生きることは、悲しく、美しく、楽しい。この世には残酷な事件や争いもあるが、僕が撮る写真には写っていない。世界の終わりとは、僕にとってひとつの桃源郷だったのかもしれない。被写体は光みにたいに絶対的な存在だから、こんなに素敵な人たちがいればカメラを向けずにはいられない。

奥出

僕には、9才年下の妹がいる。幼いころに母を亡くした僕たちは二人仲よく育った。そんな僕たちも大人になり、ある日、妹がキャバクラで働いていることを知った。僕は衝撃を受け、頭の中が真っ白になった。そして、精神的な距離を埋めようと、彼女を写真に撮った。



たかはし

飼っていたネコが死んだ。優しかった人が交通事故で突然亡くなった。会いたい人がいる。行きたい場所がある。大切だと伝えたい人がいる。暗闇を明るくする音楽がある。何も考えなくていいくらい圧倒的な星空を見たことがある。目を凝らせば、未来のかけらが散らばっている。

林

いくつもの短い旅をしてきた。カメラ1つに大量のフィルムをバッグにつめて、ひたすら歩いて、考えて、写真を撮る旅だ。写真を見た人が「ここではないどこか」を感じてくれれば、と思う。わかったようなフリをせず、言葉では表せないものを写真で表現したい。



岸田

目的やコンセプトをもって写真を撮っているのではない。写真であれ、絵画であれジャンルであるからには、批判精神が必要だと思った。目的論的に写真を撮るのではなく、感性だけで撮るのではなく、ただ与えられたものを受け入れて、総合的な判断を悟りでやるしかない。

長岡

この作品のテーマはファンタジー。日常と地続きのところにあるファンタジーを取り出すために写真を撮っている。それは自分がコントロールできるものではなく、やってくる対象に反応して撮るべきもの。自分の理解の枠を超えたいと思って、そういうふう撮ってきた。



都筑

私にとって写真を撮る行為は、素材を採取する感覚に似ている。日常の中で風景やものが発する“気配”をフィルムに焼きつける。空間に配置するときは、モチーフよりも断片のイメージの喚起が発点となる。今回は波紋が広がっていくような作品を意識した。

全員のプレゼンテーションが終わったところで、各審査員に全体的な感想を述べてもらった。進行役を務める大迫さんは「十人十色のバラエティに富んだ作品が集まった。今回の審査は難しい」と激戦を予想。平木さんは「すごく強烈なインパクトのある作品はなかったが、一人ひとりの個性が際立っていた。それがグランプリになってほしい」とレベルの高さを強調する。安田さんは「初めて審査するが、みんな一人ひとりの特徴があって、この中から1人を選ぶのは難しい。自分も写真を撮っている人間として、みんなの頑張りには心強く思える」と絞り切れない。金村さんは「ポートフォリオと展示作品で違いが印象が違ってきた」と感心しきり。原さんは「展示を見て、わからなくなった。そして、本人のプレゼンテーションを聞いて、またわからなくなった。だから、ポートフォリオをもう一回、見直している。プライオリティをポートフォリオに置きたいと思う」と述べている様子。

●「すごく不思議な距離感」「撮る必要がある写真だと思う」

全体評に続いて、出品者の10人にたいして意見の交換が行われた。まずは澄さんの作品について。平木さんが「いままでになかったタイプの作品。ドイ、クアチアの歴史的なモノメントをスケール感たっぷりに撮ったポートフォリオ写真。自分も写真を撮っている人間として、みんなの頑張りには心強く思える」と評価すれば、金村さんは「こういう場所に興味を持って写真を撮りに行くというのは、おもしろい人間性だと思う。ただ、小さなオートフォーカスカメラを使って大型カメラのような撮り方をしている点は気になる。もっと身体性を出せば」と写真の撮り方に疑問符。安田さんは「自分が美しいと思うものを追求する姿勢がおもしろい」と支持し、大迫さんも「彼の写真はスッと心に入ってきた。テーマを探して外に出ていく姿勢は貴重」と同意見。続いて中村さんの作品について。原さんが「展開力がすばらしい反面、もう少し写真に説得力がほしい」とフットワークを評価すると、平木さんも「日常性にたいする切り込みが感じられる」とおもしろがる。一方、「性能のよいデジタルカメラで撮った写真は、弱く見えてしまう」とは金村さん。安田さんも「デジタルではない写真を見たい」という気になった。中山さんは「ポートフォリオの作品のほころいという感じが促し、金村さんが『岸田さんの硬質な感じがおもしろい。彼の論理もわかる』と力を込める。続いて安田さんは「中井さんも奥出さんも、どちらも一年後には難しいですね」と決められない様子。平木さんは「岸田さんという評論家的な目も捨てがたい。奥出さんのヒューマニティあふれる真つすく写真にも興味がある」と絞り切れない。大迫さんは「中井さんも奥出さんも両方見てみたいが、奥出さんがわずかにリードする」と決断して、各審査員に挙手をお願いした。大迫さんが「この作品も中井さんと同じでモチーフとの距離感が不思議

な写真。彼女かと思っていたら妹だった」と言えば、平木さんは「このヒューマニティあふれる写真。技巧がない直球の写真」と一途な気持ちで評価。金村さんは「撮っている本人が飛んでいると思う。切羽詰った感がある。撮る必要がある写真だと思う」と本人のキャラクターを分析。原さんも「写真のセレクトがうまい」と認める。たかはしさんの作品について。開口一番「僕は好きな写真」と原さんが推す。金村さんは「写真はいいと思うが、展示と写真が合っていない」と展示形式に苦言を呈し、平木さんが「撮影の方法論はいいと思う。かなり新しい試みだ」とチャレンジ精神を評価する。林さんの作品について。金村さんが「4段掛けのきっちりした展示はどうか、写真よりも構図に目が行ってしまう」と反対意見。安田さんは「よくわかる分、将来どうなるのだろうか」と心配し、「この中では王道に近い写真」と大迫さん。岸田さんの作品について。「ある種の矛盾を感じる」とは金村さん。金村さんが言えば、「彼の種論はすばらしい。それにしてもユニークな作品」と平木さん。安田さんは「好きな写真。ただし、世の中に伝えようと思えば写真がすべてなので、このままでは思想までは伝わりにくい」と評価するが……。長岡さんの作品について。原さんが「写真に説得力がある。完成されている。それにしてもユニークな作品」と賛成。「それでやるべきことはすべてやりました」と納得。長岡さんは「自分の作品は他の人に比べてアクがなかったように思っています。展示やプレゼンテーションは初めてのことで、うまくいったかどうか自分ではわかりません」と次の挑戦をにらむ。都筑さんは「彼の論理もわかる」と力を込める。続いて安田さんは「奥出さんの作品は、焼きたてのパンのように香りがいい」とは安田さん。都筑さんの作品について。平木さんが「展示では余白の使い方がうまい」と褒めると、原さんは「ポートフォリオのレイアウトもすこいと思った」と衝撃を受けた様子。大迫さんが「写真はすくもいと思った。画面全体で感じるものがある」と同調すれば、「一点一点の写真は強い。しかし、こんな小さな展示では惜しい」と金村さん。

●「選ぶのは難しい」「中井さんも奥出さんも両方見てみたい」

一人ひとりの出品者にたいする感想を聞き終わったところで、各審査員がグランプリ候補を3人ずつ選ぶことになった。各審査員から「選ぶのは難しい」との声が上がる。そして、結果は……

金村/中井 奥出 岸田
原 /中山 たかはし 都筑
平木/奥出 岸田 都筑
安田/澄 中井 林
大迫/中井 奥出 林

これを集計すると、
中井/3票 奥出/3票 岸田/2票 林/2票 都筑/2票 澄/1票 中山/1票 たかはし/1票

予想通り票が分かれる。大迫さんが「順当なら3票の中井さんと奥出さんと決選投票ですが、その他で推したい人がいれば言ってください」と各審査員に訊ねる。そこで、金村さんが「岸田さんを推したい」と推薦すると、票を投じた平木さんも「岸田さんもいいと思う」と賛成。「それでは応援演説をお願いします」と大迫さんが促し、金村さんが「岸田さんの硬質な感じがおもしろい。彼の論理もわかる」と力を込める。続いて安田さんは「中井さんも奥出さんも、どちらも一年後には難しいですね」と決められない様子。平木さんは「岸田さんという評論家的な目も捨てがたい。奥出さんのヒューマニティあふれる真つすく写真にも興味がある」と絞り切れない。大迫さんは「中井さんも奥出さんも両方見てみたいが、奥出さんがわずかにリードする」と決断して、各審査員に挙手をお願いした。大迫さんが「明快な意見がないので、中井さん、奥出さん、岸田さんの3人が決選投票を行い」と決断して、各審査員に挙手をお願いした。

結果は……悩みに悩んだ奥出さんが最初の投票とは意見を変えて奥出さんに票を投じて、
中井/平木さんの1票
奥出/原木さん、安田さん、大迫さんの3票
岸田/金村さんの1票

「はい、奥出さんが3票を獲得。妹さんの写真を作品にした奥出さんがグランプリに決まりました。おめでとうございます」と大迫さんが宣言。会場から拍手がわき、奥出さんが「まさかグランプリに選ばれたとは思ってなかった。今は頭が真っ白。憧れの賞だった。選ばれた以上、今後一年間自分の写真を追求していきたい」と決して力強くはないが意志を感じさせる声で挨拶して、公開二次審査会が終了。

●「一生の宝ものになると思います」

審査会が終わった後で、3票を獲得し最後まで奥出さんとグランプリを競った中井さんについて、「やっと終わったという感じです。今まででいちばん、写真のことで考えた期間でした。終わった今、やはり悔しい。写真的なことを今後撮り続けていきたいです」と答えて笑った。そしてもう一人、最終決戦まで進んだ岸田さんに聞いた。「一瞬、グランプリかと思いましたが、金村さんが『岸田さんの硬質な感じがおもしろい。彼の論理もわかる』と力を込める。続いて安田さんは「中井さんも奥出さんも、どちらも一年後には難しいですね」と決められない様子。平木さんは「岸田さんという評論家的な目も捨てがたい。奥出さんのヒューマニティあふれる真つすく写真にも興味がある」と絞り切れない。大迫さんは「中井さんも奥出さんも両方見てみたいが、奥出さんがわずかにリードする」と決断して、各審査員に挙手をお願いした。大迫さんが「明快な意見がないので、中井さん、奥出さん、岸田さんの3人が決選投票を行い」と決断して、各審査員に挙手をお願いした。

コンペでしたが楽しかったです」と次回のリベンジを誓う。林さんは「2回目の出展ですが、一年前より成果がありました。現時点でやるべきことはすべてやりました」と納得。長岡さんは「自分の作品は他の人に比べてアクがなかったように思っています。展示やプレゼンテーションは初めてのことで、うまくいったかどうか自分ではわかりません」と次の挑戦をにらむ。都筑さんは「彼の論理もわかる」と力を込める。続いて安田さんは「奥出さんの作品は、焼きたてのパンのように香りがいい」とは安田さん。都筑さんの作品について。平木さんが「展示では余白の使い方がうまい」と褒めると、原さんは「ポートフォリオのレイアウトもすこいと思った」と衝撃を受けた様子。大迫さんが「写真はすくもいと思った。画面全体で感じるものがある」と同調すれば、「一点一点の写真は強い。しかし、こんな小さな展示では惜しい」と金村さん。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>